

第323回くらしの植物苑観察会 令和8年8月22日（土）

「芸をする朝顔」

仁田坂 英二 氏（九州大学大学院理学研究院 准教授）

オモトや東洋ランなどの古典園芸植物でいう「芸」とは、観賞価値が高く、その品種を特徴づける花や葉の色や形などの変異形質のことです。それぞれの芸は独立に生じるため、複数の芸を合わせ持つ品種は非常にまれで、「多芸品」としてはやされてきました。しかし、一年草である変化朝顔では世代交代が早いため、多芸品は珍しくありません。また、色や模様は芸とはよばず、特に変わった花や葉の形を「花芸」、「葉芸」とよんでいます。花芸には「風鈴」「鳥甲」「管弁」、葉芸には「雨龍葉」「爪龍葉」「芝舟葉」などの、それぞれ固有の芸を表す用語で表記されます。江戸時代に変化朝顔が生まれ、観賞されるようになった当初は、ジャンルを絞らず、より珍奇かつ豪華なものを競っていました。車咲牡丹の芸である「鳥甲」は、台咲（縮緬）と牡丹変異だけで現れ、特別な修飾変異を必要としないため比較的出現しやすく、しかも豪華です。そのため、嘉永・安政期の図譜にはかなりの数の車咲牡丹が掲載されています。一方、複数の変異の組み合わせによって成立する高度な芸は、明治以降の育種によって次第に発達していきました。変化朝顔が復興して各地に愛好会が結成されると、審査対象は獅子咲（獅子の部）、獅子牡丹（花の部）、采咲牡丹（雪の部）、車咲牡丹（月の部）の4部門に絞られ、厳密な採点基準に基づいて花の優劣が評価されるようになりました（図1）。評価の主なポイントは、花芸や葉芸の程度が高く、しかもそれらが揃っていることでした。このような基準を満たす花の出現頻度は、自ずと低くなります。例えば、すべての花芸が揃うと、「総風鈴」「総管弁」「総鳥甲」などと称され、高い評価を受けました。

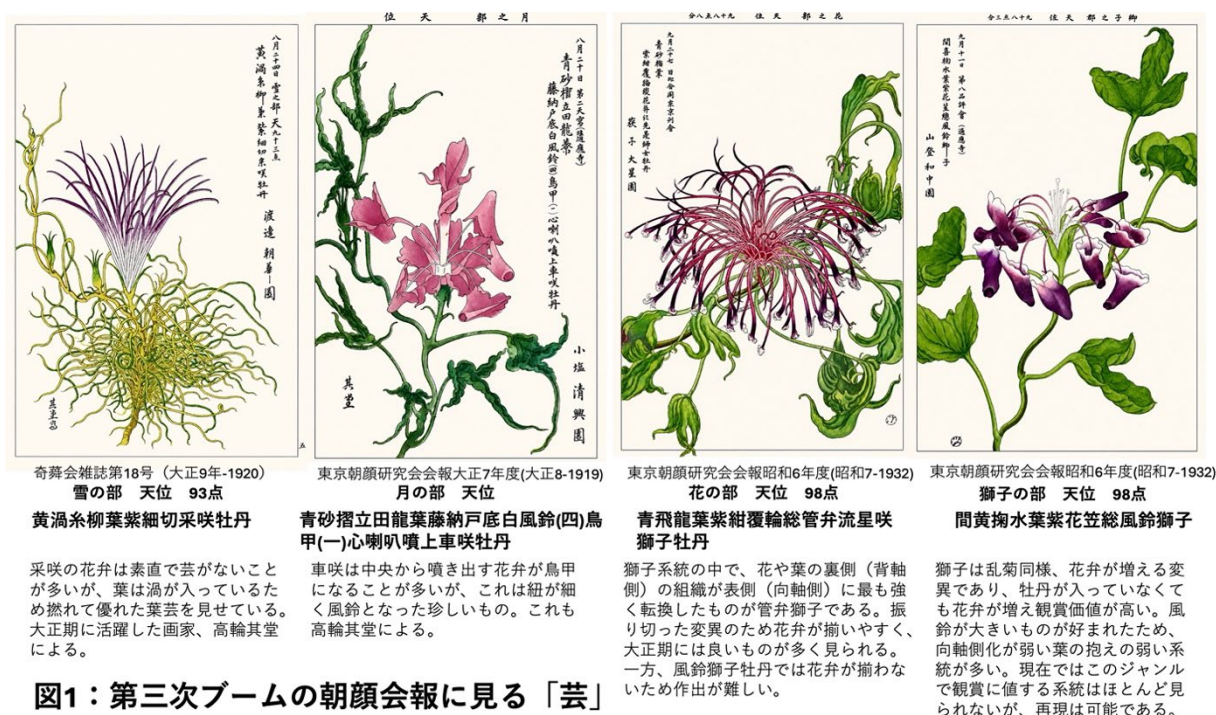


図1：第三次ブームの朝顔会報に見る「芸」

芸の発達の歴史を、獅子系統を例に順を追って見てみましょう（図2）。江戸時代の文化・文政期に記録されている獅子は「乱獅子」とよばれる、変化の程度が低く、種子のでき

る（稔性のある）^{まさき}正木でした。嘉永・安政期になると、「打込」などの芸を合わせ持ち、葉が抱え、花卉が乱れた獅子が図譜に掲載されるようになります。一方、後に主流となる風鈴獅子は、まだわずかししか見られません。この段階になると種子はほとんどできなくなり、出物として維持されていたと考えられます。明治以降の第三次ブームでは、人工交配の方法も広まり、より観賞価値の高いアサガオが追求されるようになりました。その結果、芸に関わる変異が集積し、花卉が細い管状となり、先端が折り返す「風鈴」や「管弁」といった花芸が確立しました。また葉芸についても、より抱えの強い「龍葉」へと発達していきました。

最近、「管弁化1」、「管弁化2」に相当する遺伝子が明らかになりました。これらは獅子遺伝子と共通の祖先から生じた兄弟遺伝子（パラログ）で、獅子との多重変異になることによって、花や葉の裏側の性質が表側の性質へと転換し、葉は強く抱え、花卉は細い筒状に変化することが明らかになりました。さらに、管弁化2変異には異なる2種類の変異が存在することから、管弁獅子が一度だけではなく、独立した選抜によって作り出されたことも示唆されます。なお、獅子や牡丹はヘテロ接合の状態で維持されているのに対し、管弁化1、管弁化2、打込などはホモ接合の状態で維持されています。これらの修飾変異は、それだけでは葉がやや強く抱える程度で、稔性にも大きな影響を与えません。そのため、単独ではその存在に気づきにくく、複数の変異が組み合わせられて初めて、華麗な「芸」として姿を現します。

名称					
	乱獅子	平弁獅子	風鈴獅子	管弁獅子 (管弁交)	管弁獅子
花芸	なし	なし	風鈴	管弁	管弁
葉芸	なし	抱葉～掬水葉	爪龍葉	掬水葉～爪龍葉	飛龍葉・蛸葉
保持する 変異	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子
		打込	打込	打込	打込
			管弁化1	管弁化2	管弁化1 管弁化2

図2：獅子系統の「芸」関連遺伝子

本講演では、このように変化朝顔の観賞価値を高めてきた「芸」について、その成立と発達の歴史をたどるとともに、現代の分子遺伝学によって明らかになってきた仕組みを紹介し、人々による選抜がどのように複雑な園芸形質を作り上げてきたのかを考えてみたいと思います。

.....

次回予告 第324回くらしの植物苑観察会 令和8年9月26日（土）
「衣になる植物」

玉井 里奈氏他（千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課 副主査）
13：30～15：30 くらしの植物苑 東屋 申込不要